

みなとメディアミュージアム2017におけるアートイベントの評価実践

テーマ設定「対峙したあと」



みなとメディアミュージアム



August 12 SAT. - September 3 SUN. 2017

平日 10:00-17:00 休日 10:00-19:00 ※定休日：月・火曜日
会場：茨城県ひたちなか市ひたちなか海浜鉄道湊線沿線地域 那珂湊駅周辺
アクセス：JR 東京駅から常磐線特急で約80分→JR 那珂湊駅からひたちなか海浜鉄道に乗り換え約15分→那珂湊駅
入場料：1歳未満の子供は無料。小学生以下は500円。中学生以上は800円。高校生以上は1000円。団体割引あり。
入場無料

対峙したあと

みなとメディアミュージアム(以下、MMM)は「産+学+芸」による、地域密着型のアートプロジェクトである。9年目の今回は、継続企画であるワークショップの拡充と、新たな展示場所の拡大を行なった。

学生スタッフはMMM2017のテーマを「対峙したあと」と設定した。MMMの展示・活動を通じて地域住民・作家・鑑賞者・スタッフが作品や土地、そして人と対峙することで、変容をもたらした先を見据えることを目標とした。今年度は会場である那珂湊外への出展、小学校、クリニックへのワークショップなどの地域連携活動が活発に行われ、本会期においても作品が展示された。(比留川)

本稿では、各種活動の紹介とともに、社会的インパクト調査の手法をもとにした活動の評価を一部行い、その進捗を一部公開する。

大賞作品『おのがすがたを うつしてやみん』

Sawa Yukio 『おのがすがたを うつしてやみん』



Sawa Yukioの作品は、現地に滞在しながら制作を行い、作品だけでなく人と地域と向き合っていた。大沢さんは声をかけるなどして計画的に人を集めたわけではない。地域の人々の心を揺さぶり、いつの間にか那珂湊の人たちを巻き込んで、多くの協力者のもと制作が進んだ。そこには地域との関わりが作品の制作をする作家の姿が見られた。

作品の素材には那珂湊の海岸で収集した流木を用い、地域・人・作家自身と対峙しながら、作品は日々成長し続けた。その作品は、地域が持つ資源やその土地に触れていたからこそ現れた形となり、地域特有のものになったと思う。人と地域と共生していくアートとなり、大賞にふさわしい作品となった。

地域連携

小学校とのワークショップ

那珂湊第一小学校の4,5年生の児童(115名)を対象に2種類のワークショップを実行した。本件で完成したものをベースにMMM2017の展示作品を作家が制作した。作家43による「BANKOKKI」は去年からのプロジェクトで、毎年完成した作品が継ぎ足されていく。作品規模が大きくなることにも目を引くが、子どもたちの成長と比例して色褪せることにも時間の経過を表現する。MMMのスタッフ、そして地元の子供たちが密にかかわり、世代間の交流にも繋がった。このイベントを通じて子どもたちがアートに対して少しでも興味・関心をもってほしい、主体性を身につける目標は達成できた。(村尾)



小学校WS風景



恵愛小林クリニック

これまでのMMMの活動から恵愛小林クリニックから展示場所の依頼を受けた。恵愛小林クリニックはMMMの新たな展示場所となり、アートと地域の人々をつなぐ場として活躍した。この場所は高齢者のデイケアと、線路沿いにある立地から、これまでにMMMに来院することのなかった層に展示を鑑賞してもらうことができた。

その成果は、クリニックという、那珂湊に暮らす人が日々利用する場を展示場所にすることにより我々MMM側から地域の人へ寄り添う形で、多くの方の日常風景にアートの彩を加え、作家の作品と対峙する機会を生み出したことである。

また、デイサービスを利用する人たちが水戸工業高校美術部の生徒と一緒に沖縄の民芸品『指ハブ』を作るワークショップでは、デイサービス利用者、恵愛小林クリニック職員、水戸工業高校美術部の生徒とMMMスタッフ全員が年代を越えてモノづくりの楽しさを共有し体験した。



指ハブワークショップ風景



クリニック設営風景

活動評価

ロジックモデルの構築

MMMには暫定的に以下の目標が存在する。一つは、「児童を中心として地域住民に美術鑑賞機会を提供すること」。もう一つはそれを通じて、「現代アートを通して、創造的で、多様な価値観を共有する場を那珂湊につくること」。以上2点をもとに、目標達成までのロジックモデルを構築。これをもとに、目標達成のための指標を作ることにした。

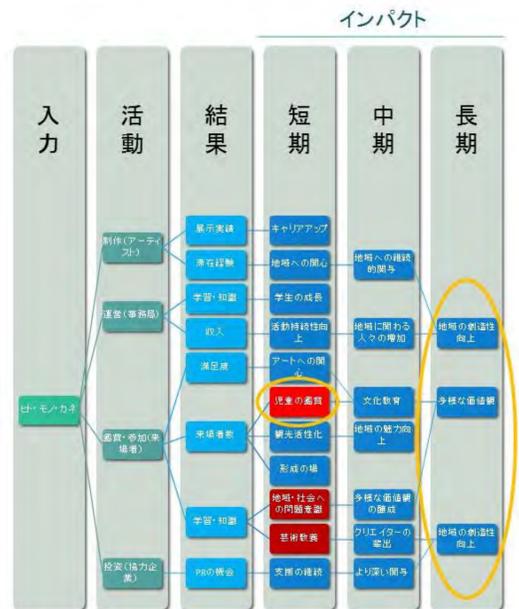
指標を用いた活動評価

例えば、アーティストの臼田那智氏のワークショップでは、合計133人の高校生以下の児童が活動に関与した。

那珂湊地域では1378人の小中学生児童がおり、およそ10%の児童に美術体験を積んでもらうことができた。児童への活動に関しては他にも先述の小学校WSが今年で3年目となり、これまで約300人の児童に制作の機会を提供できている。今年度のYuki Osawa氏のWSも120人の小学校児童を対象にできた。一方、現状では小学校ワークショップの参加をきっかけにMMMの作品展示の鑑賞をした割合は、約18%とあまり高くない。この数値を上げていくことも今後の課題となるだろう。

こうした、活動目的と照らした指標の設計と数値の計測を継続して行うことで、プロジェクトの目標達成にどの程度近づいているかが把握しやすくなる。

また、芸術活動を評価する上で、派生エピソードの記述は欠かせない。記録集冊子にも掲載されているような内容含め、作家や地域住民のヒアリング、SNSから活動の状況把握に役立てた。



まとめ・今後の課題

MMMの今年度の開催テーマは「対峙したあと」。MMMのテーマは毎年時節に合わせて変化をし、そのたびに多様なアーティストが多様な展示を行ってきた。しかし、これからはMMM実行委員会そのものが具体的にビジョンを持つことが求められるだろう。MMMは多様な活動を内包し、「地域活性化」というマジックワードでは分類しきれない状態にある。その目標を再定義しなければ、どんなインパクトを社会に与えていくのかが明確にならない。今回試みた社会的インパクト調査では、改めてそのことを痛感する結果となった。とはいえ、MMMには暫定的に、「児童を中心として地域住民に美術鑑賞機会を提供すること」、それを通じて、「現代アートを通して、創造的で、多様な価値観を共有する場を那珂湊につくること」が目標として存在する。こうした目標を磨き、今後の活動の道標にしたい。(浅野)